

家田仁
今井猛嘉
岩貞るみこ
喜多秀行
長谷川孝明
福田敦
藤岡健彦
松橋啓介
山中俊治

代表パネリスト

岩貞るみこ

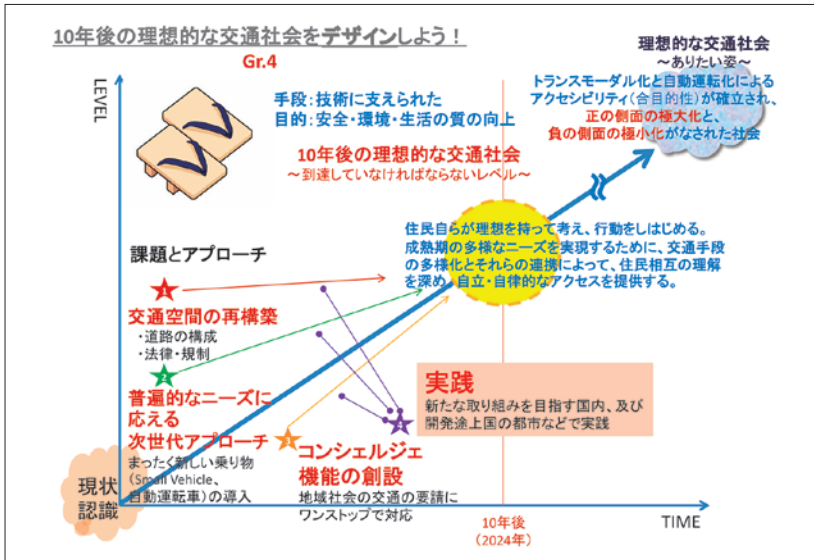
モータージャーナリスト、
ノンフィクション作家



10年後の理想的な交通社会について、グループ4は次のように考えました。

最終的にありたい姿、理想的な交通社会は、トランスモータル化と自動運転化によって移動の自由を手に入れ、物の購入など、移動しなくても目的が果たせるようになることです。そうなれば、交通社会がもたらす正の側面が大きくなり、交通事故や環境問題という負の側面が小さくなります。それが最終的に目指すものだと思っています。

そうした未来に向かうために、10年後はどういう社会を目指すべきなのか。スモールビークル、自動走行する車など新しい乗り物が登場するほか、大都市と地域社会、年齢層、男女の性差、ワークライフバランスに応じた交通手段に対する要請の違いは、10年後にはさらに進んでいるはずです。それに応える社会を考えなければいけません。そのためには交通社会



を支える人、つまり道路ユーザーが、こういう交通が望ましいと考え、発信し、それに対して責任を持って改善していくことが望ましい社会だと思っています。

そこで、10年後の実現のための課題とアプローチとして、三点を挙げました。上図の中では、赤い星、緑の星、黄色い星で示してあります。

赤い星は道路の構成です。いまある道路は本当に最適なのか。道幅、車道、歩道、自転車道、ガードレール、信号機、ラウンドアバウトを含め、建設した当時から時代の変化、意識の変化、年齢構成の変化、移動環境の変化、交通量の変化などにきちんと対応できているのか、もう一度見極めていく必要があるはずです。また今後は、つくり替えて対応していく柔軟性を持ち合わせた道路のつくり方をしていくことが求められます。

赤い星ではもうひとつ、法律・規則を挙げています。今後、スモールビークルの登場や、自動運転車の技術レベルが上がることを想定して法律や規則、制度を進めていく必要があります。私たちの時代は、危険運転致死傷罪の罰則強化により、法制化当初は、飲酒運転で捕まるよりもひき逃げをしたほうが逃げ得であるというねじれた結果を生むことになりました。そうしたことが起こらないように、自動運転といった未知の世界に踏み込み、法律で可能な限り対応すると同時に、改善点が生じたら速やかにかつ柔軟に改善できるシステムにしておく必要があります。

次に、緑の星は時代のニーズを先取りしてそれを実施していくことです。これからはスモールモビリティや自動運転車という新しい存在が必ず登場してきます。新種が出現すると、最初は必ず何がしかのトラブルを引き起こすものですが、うまく社会にリリースし、その後上手に育てていくことが肝心です。道路も車も、ただあれば良いというのではなく、それをどう使いこなし、育てていくかが重要です。

黄色い星については、例えば大都市と地域社会、山間部などでは求めるものが違ってきます。さまざまな人がそれぞれのニーズを持って、こう改良したい、こういう交通社会にしていきたいと思っても、その声をどうすれば良いのかわかりません。そのため、とくに小回りの利く小さな地域社会では「交通コンシェルジュ」という存在が必要になってくると思います。住民が積極的に交通社会に参加できるようにすると同時に、責任を持って交通社

会に参画し、行動するという意識を持つてもらおうようにしなければいけません。これまでは、住民は何かしてくるのを待ただけという構図が強く出ていたように思います。いまの言葉で言うところ「大仏状態」ですが、そうではなく、お互いが生きた意見を交わし、血の通った道路づくり、交通社会づくりをしていくことが必要になると考えています。

3年前の東日本大震災の経験からすると、道路インフラに頼ったシステムは災害に弱く、1本の交通体系が寸断されたらほかに手段はありません。分散型、あるいはプローブ型などを導入することで、ひとつのシステムが壊れてもほかに代替手段のあるシステムが強く望まれるところです。

日本はこれまで、アメリカ、イギリスなど先進国を見習って交通インフラを整備してきました。発展途上国ではどうかというと、ナビゲーションシステムについてもスマートフォンを使い、クラウドを使い、従来の日本と比べると非常に安くしかし迅速に、実質的には同じようなサービスを受けられていることが多々あります。私たちはそういうこともさらに勉強し、既得権や既存の考え、あるいは「もう始めてしまったから、使わないと先輩方の顔が立たない」という考えにとらわれることなく、どうしたら少ない財政投入で最大の効果を上げることができるのかを見直していきたいと思います。そして、新たな取り組みは国内外を問わず、志ある市町村で実践していく必要があると思います。そうやって実践していくというのが、図上に紫の星で示した部分です。

スモールビークルや自動運転車という社会的な取り組みは、IATSSとしても強く進め、積極的に意見を発信していく課題だと感じています。高齢化社会、外国人の増加など、これから日本の道を使うユーザーは大きく変わっていきます。そうしたことを踏まえ、未来に備えて、将来の社会に対応する交通システムをつくっていききたいと思います。

キーワード

「先取り」「柔軟性」「権利と責任」